

書評

回避不能な免疫逃避パンデミック

The Inescapable Immune Escape Pandemic

評 高橋公太 (新潟大学名誉教授，高橋記念医学研究所所長)

2019年12月，中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は，全世界にパンデミックを起し，2023年8月現在，累計約7億7千万人が罹患し，そのうち約700万人が死亡した。その間，ワクチン開発が急速に進められ，わが国では今春より第6回目の接種が実施されている。このワクチンは，症状改善には効果はみられるものの，感染拡大予防効果には疑問を抱いている人も多い。

ワクチンの歴史を紐解いてみると，近代免疫学の父と呼ばれたエドワード・ジェンナー (1749-1823年) が，それまで実施されてきた人痘接種法よりも安全性の高い牛痘接種法 (種痘接種法) 開発した時代までさかのぼる。

新しいワクチンが開発されると，その効果が強調され，その期待も大きく，ワクチンの功罪について十分論議されないまま，実施されてしまう傾向がある。さらに一般市民も十分に理解せず，われ先にと，その接種に飛びついてしまっているのが現実である。新型コロナウイルス感染 (SARS-CoV-2) ワクチンにおいても同様な傾向がみられ，一部の副反応のことが強調され，マスメディアもときどき取り上げている。しかし，ワクチンの副作用は，目に見える副反応や後遺症のみではなく，その本質はもっと根深い。本書はそれを指摘し警鐘を鳴らしている。

集団ワクチン接種をした結果，集団免疫が得られるのか，得られないのか。本書は，実際にどのようなことが起きているのかを詳細に検討している。筆者はワクチンの一部の効果を認めている一方で，この本を読んで，著者が展開している理論，すなわち，今まで想像していなかった意外なことが起きている可能性を知り，啞然とした。



四六判 288 頁

2023年7月 発行

1,980 円 (税込)

花伝社

本書は最近の SARS-CoV-2 のオミクロン株の流行を主に対象としている。筆者が深く印象を受けた2つの事例を紹介したい。

SARS-CoV-2 の自然感染では，宿主において細胞性自然免疫が立ち上がり，感染症から回復させるが，ワクチン接種を受けるとその立ち上がりが悪く，かえって重症化する場合がある。また，自然免疫の学習効果が得られず，ワクチンでの獲得免疫はウイルスの変異に追いつかず，次の変異株の感染症に対処できないことが多い。

また，集団でワクチン接種すると，個々の患者に，抗体価に差がみられるように，必ずしも集団全体に均一な成熟抗体が形成されるわけではない。その不均一性がもたらす弊害として，感染性のより強く，病原性も強い変異株が誕生する。いわゆる，ブレイク・スルー感染の原因となることがあり，次の波の流行をもたらす。このことは，新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行の波を見てもうなずける。

本書は，ウイルス感染症やワクチン接種に興味ある読者にとって必読の書である。英文原著は難解であるが，翻訳本では用語も分かりやすく解説してあるので理解しやすい。オミクロン株の流行は最近であるが，この短期間に翻訳した渡邊裕美先生に敬意を表する。